

矢作川の流域における祭礼と服装についての調査（第1報）

稲武のまつり

足助地方の夜念仏とあやど踊り

猿投の棒の手

栃原きみえ・齊藤一枝・坂倉園江

菊山弘子・済木敦子・戸田光子

菊地真理子・原 淑子

Investigation on the Festival and Costume in the Basin of River Yahagi (Part I)

by

Kimie TOCHIHARA, Kazue SAITŌ, Sonoe SAKAKURA,

Hiroko KIKUYAMA, Atuko SAIKI,

Mituko TODA, Mariko KIKUCHI and Toshiko HARA

緒 言

本学生活科学研究所においては、1960年より「矢作川流域における自然と文化に関する総合学術調査」を行なっている。衣、食、住のうち衣の部門を担当した筆者等は、先に農作業衣の調査をして報告したが、引き続き「まつりと服装について」調査を行なった。

まつりの内容については県史や郡誌に記載され、明らかにされているが、服装に関しては全くふれられていないといっても過言ではない。このことは、まつりの伝承上大きな支障を来たすであろう。従って、まつりとその衣裳の実態について調査をしたのでここに報告する。なお、まつりについては「矢作川流域の文化」（本学生活科学研究所発行）に発表したもので、ここでは服装についての詳細を報告し、まつりの内容については概略を述べることにする。

調査対象および方法

矢作川流域を上流、中流、下流に分け、上流では稲武町稲橋のまつり、中流では足助地方の夜念仏とあやど踊り、猿投の棒の手、岡崎市瀧山寺の鬼まつり、下流では西尾の大名行列、三河万才、てんてこまつり、吉良吉田の馬かけを調査対象として選出した。今回は上流の“稲武町稲橋のまつり”中流の“足助地方の夜念仏とあやどおどり”“猿投の棒の手”を取りあげ、第1報として報告する。

調査方法としては、図書館で郷土史的な図書によって予備知識を得て現地へおもむき、市役所、町役場、祭礼関係者、古老などに聞き取り調査をした。なお、祭礼当日に現地に行き祭礼風景や衣裳、装身具、道具等はカラー写真により色彩、柄、形態をとらえ、実物衣裳の各部分については、綿密に採寸して平面図を作製した。調査期間は1963年から1965年までである。

稲武のまつり

神社名 八幡神社

祭神 応神天皇

祭礼地 愛知県北設楽郡稲武町稲橋

祭礼日 8月15日（昭和37年までは9月15日）

矢作川の上流地域にある長野県根羽村，岐阜県の上矢作町，愛知県の小原村などは，農林業地域であって都市から遠隔の地にあるために交通，文化の面などで多少欠けるところはあるが，地方独特の素朴な気風が村民に受けつられている。

まつりについてみても，中流，下流においては幾多の大祭，奇祭がみられるが，上流では，稚子などを中心にした素朴なまつりが行なわれているにすぎない。しかし，旭村には無形文化財に指定された棒の手があつて杉本，大坪の2部落でまつりの時にこれを奉納している。棒の手については“猿投神社の棒の手”があるのでその項で報告をする。従つてここでは，上流一帯のまつりの中から稲武町稲橋にある八幡神社のまつりをとりあげることにした。このまつりは明治23年に神社再建後，始められて現在に至っている。

祭事及び服装

このまつりは各地でみられるような山車や，みこし，囃子を中心に行なわれるのである。

若者は，白の綿ギンバジンのショートパンツに，茶色木綿の袴のついたあさぎ色のまつり半天を着用するが，まつり半天は背に“祭”の文字の入った桜の図柄，袴には稲橋青年の文字が白く染め抜かれている。（図1，図2）頭には豆しほりの手ぬぐいを結ぶ。昭和37年までは9月15日にまつりが行なわれたために，ショートパンツの代わりに，消防士の股引あるいはジーンパンツが用いられたということである。

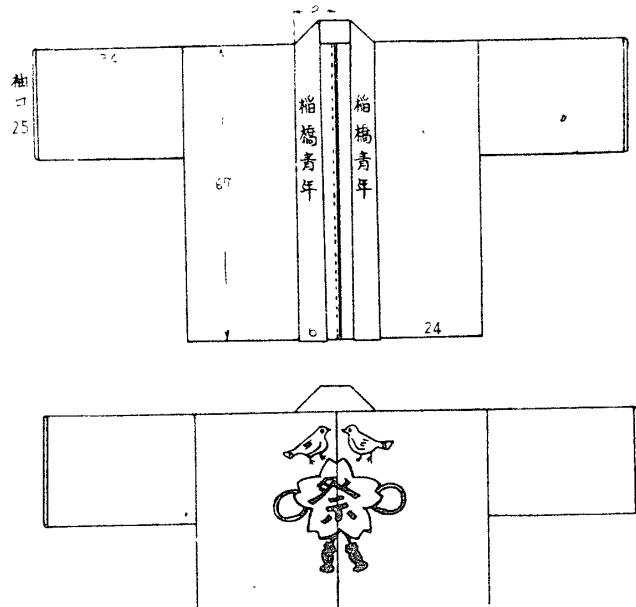
女子は町内で揃えた白地に紺の波模様の浴衣に水色の帯をしめる。

図1 稲武のまつり



まつり半天

図2 稲武のまつり



まつり半天

数字の単位はcm. 以下各図の数字cmを示す。

子供はズボンにまつり半天を着用する。

みこしをかついた若者を中心に行列は当地の公民館を出発して村をねり歩き、武節部落の境まで行き、そこで引き返して再び八幡神社に帰るのである。

足助地方の夜念仏とあやど踊り

(別名 足助あやど踊り)

愛知県指定無形文化財 昭和37年3月10日

平勝寺 愛知県東加茂郡足助町大字綾渡

祭 神 聖観世音菩薩

祭礼日 8月13, 14, 15日 (以前は旧盆¹⁾)

夜念仏とあやど踊りは平勝寺のうら盆会として行なわれる行事である。

由 来

平勝寺の由来は古く香積九世明峰書の“鳳凰山平勝寺略縁記”(元和2年1616年)によれば「元徳2年(1330年)後醍醐天皇第3皇子、平勝法親皇が‘元弘の変²⁾’の際足助に落ちのびられ、本尊聖観世音菩薩に、^{おき}隠岐に流された後醍醐天皇の還都を祈願された。その満願の日^{たつみ}に夢の中で巽の方に鳳凰が飛び立つのを見られた。その翌朝、天皇還都の報をお受けになり非常に喜ばれ鳳凰山平勝寺の名を賜った³⁾」と記されている。この聖観世音菩薩は、平治元年(1154年)に作られたもので昭和14年に国宝に、次いで昭和25年8月には国の文化財に指定されており、高さ約150cmの座像である。菩薩の左右にある“木造2天像”と、平勝法親皇直筆の“平勝寺”とかかれた扁額も県の文化財に指定されている⁴⁾。

夜 念 仏

8月13, 14, 15日の夜、*折子と称するつり灯ろうの前後に、一文字傘をかぶった若連(若い男子)が鉦を打ちながら行列し、念仏をとなえてお寺に向かう。まづ道では道音頭を、辻では辻念仏を、境内では庭念仏をとなえる。つづいて門開きの念仏・神回向・仏回向をとなえて最後に和讃“西の河原”をとなえておわる古来そのままの行事である。

その後引きつづいてあやど踊りが行なわれるが、これも古来より伝わる古いかたちの盆踊りで、夜念仏の若連を中心に音頭取り(男子)の美しい音声につれて男子も女子も輪になって踊る。盆踊りとはいえ非常に歯切れが良く威勢の良い踊りである。踊りの種類は10種あり⁵⁾、ややむずかしく見受けられる。秋の香嵐溪もみじ祭りには観光事業の一端をになって、あやど踊り講習会を開き免許証を交付している。



図3 夜念仏の折子を持った若連

夜念仏とあやど踊りの起源は、平勝寺の過去3回にわたる火災により、文献のほとんどが焼失し明らかではないが、平勝寺住職小川昇堂氏は建治年間（13世期後半）一遍上人の頃から始められたものではないかと云われている。

* 折子

つり灯ろうの一種で、夜念仏の行列の前後にあかりを灯して若連か持つ。屋根は相撲のつり屋根の形によく似ており、木製黒塗りで、赤い糸を張りめぐらし、白い和紙の房（約25cm）が四方にさげられている。その下には「南無阿彌陀仏」の文字と地獄、極楽の絵を描いた火袋があり、赤紐の房（約55cm）が下けられている。火袋の下からは四枚の白い和紙が約77.8cmたれさがり、全長は155cmにもなる。この灯ろうは長く長い竹竿につり下げられている。（図3）

数多くの文献の中に折子と称する灯ろうは見当たらない。折子に似たものに切子と称するものがあるが、これが折子へと変化して行ったものと思われる。切子とは火袋の角形の隅を切り落した、盆に使用される吊り灯ろうの事で、火袋の角々に牡丹・虫草などの造花をつけ、竿のあたりから細く切った口紙が幾筋も下けられ、灯ろうの四方へは傾像を透かし切りにした広巾三枚抜ききの白紙をつけたものである⁶⁾。盆灯ろうには、盆の期間中屋外にともす屋根のついたものがあるが、綾段の折子は、切子にこの屋根がとり入れられて出来たものと思われる。

服 装

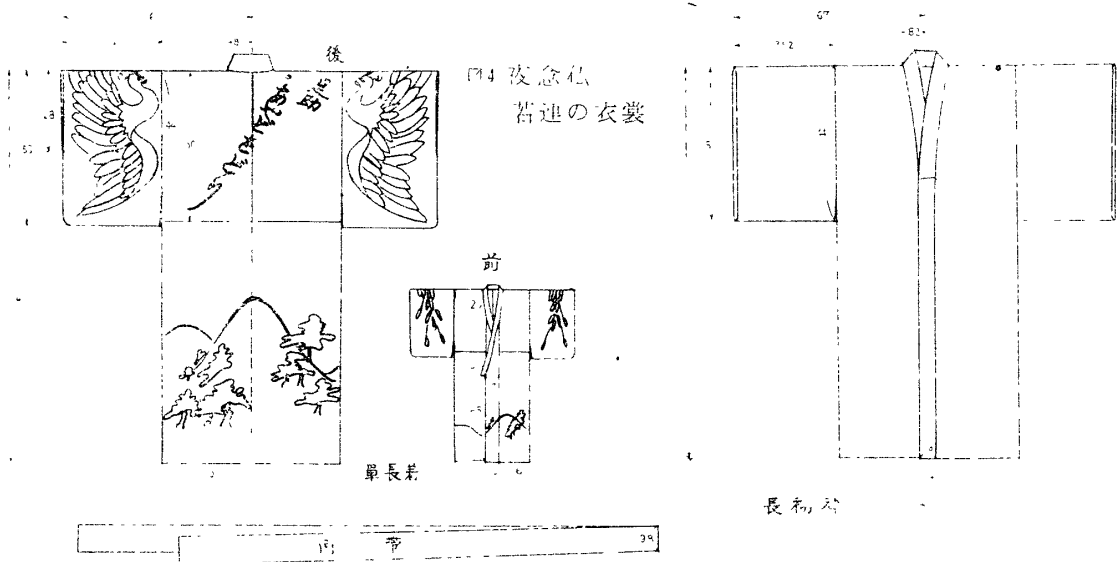
夜念仏のあと引きつついてあやど踊りに入るのて、夜念仏とあやど踊りの衣裳は同じものを用いる。あやど踊りになると一般の人も加わって踊るが、若連のほかは自由である。しかし最近の傾向として、婦人会などが揃いのゆかたを作って祭りにはなやかさをそえている。

若 連 の 服 装

* 単長着に木綿の小倉織（オリーブ灰色）の角帯をしめ、白足袋に男下駄（昔は日和下駄をはいた）をはき、頭には **一文字傘をかぶる。これは佐渡おけさに似た服装でなかなか趣きがある。（図3）

* 単長着

以前着物はそれぞれ持ち合せのゆかたを着用していたが、現在は皇太子御成婚を記念して揃えて作られた単長着を使用している。（夜念仏及びあやど踊り保存会会長 藤沢彦一氏談）材質は緑味灰色の厚手木綿



である。長着の裾には平勝寺のある鳳凰山を型とり向袖には白い鳳凰が大きく翼をひろげ、背には“足助あやとおとり”と赤く染め出されている。(図4)

長襦袢じゆげんは以前着用しなかったが、単長着を新調した時に観光衣裳として、青緑のベンベルクテシムで新しく作られたもので、衿には白を使っている。(図4)

** 一文字傘

編立の一種である。これは赤い布を編みこんたはなやかなもので、片側には“夜念仏”もう一方には“あやとおどり”と甲で書かれている。現在使用されているものは単長着と同時に新調されたものである(図3)

猿投の棒の手

愛知県指定無形文化財 昭和33年3月

猿投神社 愛知県西加茂郡猿投町大字猿投

祭 神 大碓命，景行天皇，垂仁天皇

祭 礼 日 10月9日

由 来

猿投神社において、毎年10月9日の祭礼日に“棒の手”と“猷馬”の行事が奉納される。この行事は、祭礼行事として古来より広く矢作川流域の神社で行なわれていたが、衰亡の一途をたどり、現在では、猿投の棒の手がその伝統を最もよくとどめている。棒の手の発祥は古く、景行天皇が尾張平野に行幸された際、土民の自衛武芸である“棒術”を上覧に供したことに始まり、その変遷は歴史と共に移行した。土民の自衛武芸から戦国時代の農兵武術へ、更に徳川時代の政策により郷土芸能として隆盛をきわめ、明治の頃まで栄えた⁷⁾。その後太平洋戦争で一時中絶したが、戦後郷土芸能として土地の人達が、自主的に再興し、現在は無形文化財に指定され、年々盛んに各地で行なわれている。

猿投神社の棒の手奉納の行事

天文23年頃尾張の岩崎城主、丹羽勘助氏次が、棒術を学んだ村人をつのり、猿投神社に詣でたのに始まると伝えられる⁸⁾。この猿投の棒の手は、一名喧嘩まつりとも云われ、神社大門前の大橋通行の協定をめぐって、各合属(農民の自衛武芸の時代に出来たもので、利害を同じくする各部落民が集って作った自衛団体で、幾世紀にわたる試練をへて、棒の手を中心とした合宿組織に移行したと伝えられる⁷⁾。猿投神社には昔12の合属が“棒の手”“猷馬”を奉納したと“猿投神社と猿投の棒の手由来”⁸⁾に記され、当時の隆盛をしのばせている。)が、互に、気負い立ち血を流す乱闘騒ぎがたびたび生じ、全国的にも有名なまつりであったと云う⁹⁾。古来は、本神社の節句まつり(旧暦9月8、9日)に奉納されていたが⁹⁾、昭和37年より、新暦10月9日を祭礼日として、猿投の氏子のみで奉納されている。

棒の手奉納の行列は、公民館(昔は精進宿)でくまれて猿投神社に向かう。棒の手保存会の旗印(昔は各合属の旗)を先頭に、世話役(昔は村役人および年寄り)、猷馬を引いた棒の手装束の男子、その後に棒の手演技者が子供から大人の順にならひ、最後に鎌を持った警固の者がつく。行列の出発や停止など種々の合図に、火縄銃



図5 棒の手演技

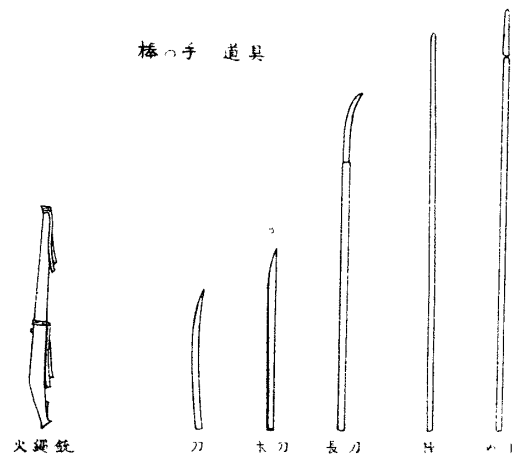
を打ちならし祭礼気分をもちあけながら、神社にむかい神前において棒の手演技を奉納する。

棒の手の演技 (図5)

生死を賭けた真剣試合を演技するもので、仕手、受手両者の呼吸かびったりあった絶妙の応酬は長い年期を必要とし、普通10年位はかかるという。

棒の手の道具

表型(表の演技)には棒と木刀、裏型(裏の演技)には太刀、長刀、槍、大身槍、片鎌、鎖鎌、長柄鎌など、刃物を用い、その他、十手、傘、鞭などを用いる。合図には、火縄銃を使う(図6)



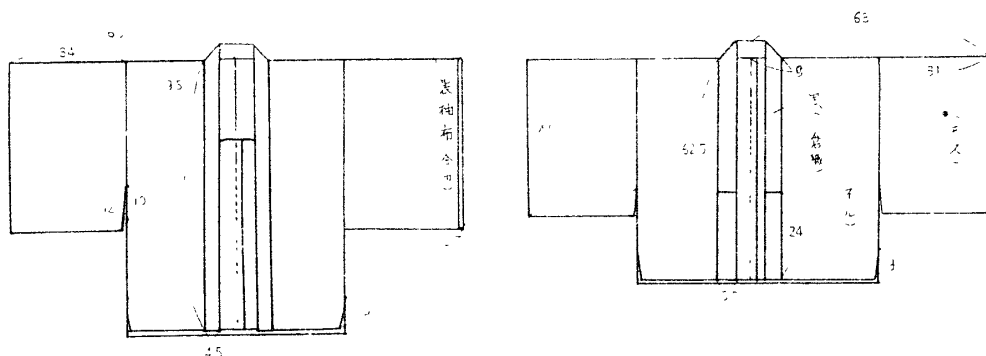
服 装

棒の手演技者の服装——紺の*警固半天に**股引をはき、***風切りと称する胸当てをあてて、はなやかな****たすきを大きく結び、紺の*****腕貫に*****脚半をつけ、白足袋に布わらし(布を編込んだわらし)をはく。頭には豆しぼりの手拭で鉢巻きをし、見るからに軽装で勇ましい姿である(図5)この服装は各流儀、各合属もほとんど同じである。

世話役の服装——棒の手の服装の上に紋付き羽織をはおり、道中傘をかぶる。

* 警固半天

紺又は黒の本綿で羽織に似た形態である。裾はなく、衿は折り返らず襦袢しゆはんに似た形のものである。両脇には短い馬乗りがついているが、これは試合をする時の機能性を考えての事であろう。この半天は献馬を警固する棒の手演技者が着用するところから警固半天と呼びならされたものと思われる。この半天の下には、半襦袢を着るか、半襦袢の形は半天に合わせてしゆはんられており、前身頃の衿付けに傾斜(打合いの為)かない。(図7)



棒の手警固半天

半襦袢

半天とは、天明から文化の時代に、羽織から変化したもので、中流以下の者が着用する略服である。形態は羽織に似ているが裾がなく衿は折り返りかない。その上、胸紐のないのが特徴で、はおって着るところから半天羽織ともいった

その外、防暴用の緋人半天、仕事師などが、台頃出入りする大家からもらう印半天、又の短いこもり蝙蝠半天、

皮革製の革半天などがある。

** 股引 (図8)

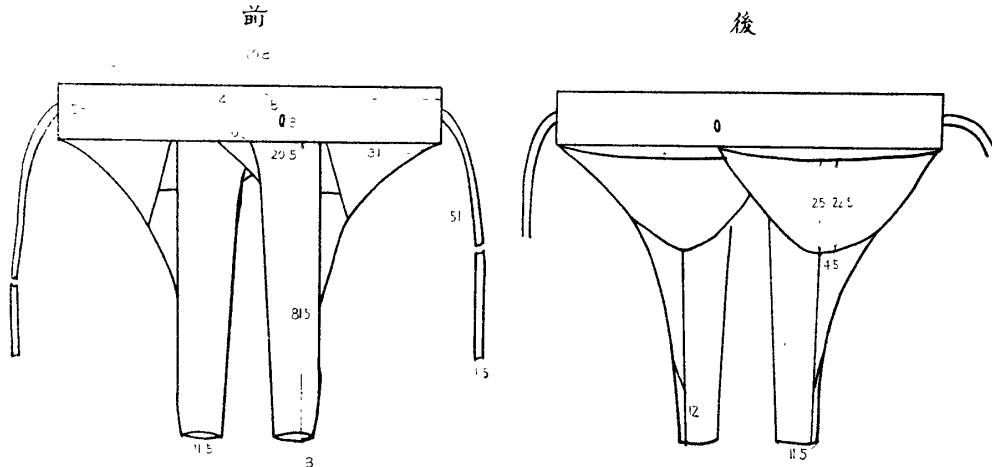


図8 袴の手股引

昔はあさき色の股引であったが、黒又は紺木綿を穿くようになり、最近では略してメリヤスのズボン下(子供はトレーニングパンツ)を用いる者もある。

股引とは、脚半の別名をハバキというが、ハバキの股^{もも}までであるところから、モモハバキとなり、股引と転訛したと云われ、鎌倉時代から現われ、江戸時代には盛んに使われるようになった仕事着の一種である。

*** 風切り

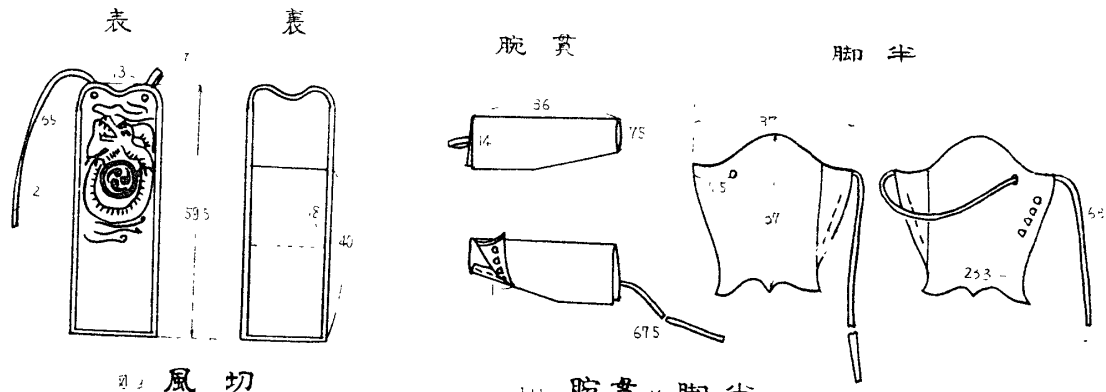
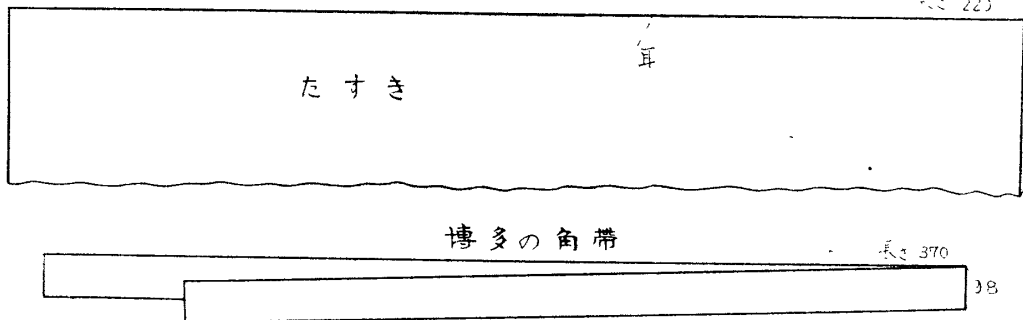


図9 風切

図10 腕貫と脚半

図10 たすきと帯



博多の角帯

胸当ての一種である。材質は赤の糺紗地で周囲は黒の玉縁に仕立てられており、首から吊るして付け、その上に髻固半天をはおり、三尺帯を締めて落ちつかせる。胸には上り龍、下り龍、又は家紋、三つ巴の

紋などが、金糸銀糸で豪華に刺してある。裏は綿更紗で中央に大きなポケットがついている。(図9)

服装史には、風切りと称するものは見当たらないが、形態のよく似たものに、武家の火事装束(江戸時代)の胸当てと、大工、左官などが使用した腹掛けの2種類がある。火事装束の胸当ては、羅紗、雲斎織りなど厚地で堅牢な地質を用い、色は白、茶、青、黒、緋などで、胸当ての中央には大きな家紋を付けたとある⁹⁾。

この形態は棒の手の風切りとまったく同じのものである。腹掛けは、大工、左官などが股引、半天と共に付けるもので、これは胸部と腹部を覆い共布の紐を背中てすきにして着る。材質は紺木綿を用い、腹部には大きなどんぶりと称するポケットがある⁹⁾。

風切りと云う語意は風切りに用いる屋根の丸瓦と、建築物の出入口に外気を防ぐと共に暖房の熱散逸を防ぐなどのためにつける一種の衝立^{ついで}の、2通りの意味を持っている¹⁰⁾。いづれも風をさえぎり、何かを保護するためのもので、この意味から胸当の事を風切りと呼ぶようになったものと思われる

棒の手の風切りは、始め布の腹巻きで、体を保護していたと思われる。戦国時代には長久手の戦いにおいて農兵が棒術を使って戦場を駆使したことは、史実にも明らかであり、この時代には武具の一種である腹当や、腹巻(具足)などをつけていたものと思われる。江戸時代には、武術としての他流試合を禁じられるようになり、郷土芸能にふさわしい胸当を必要とするようになったと思われる。そこでほぼ時を同じくして用いられていた華麗な武家の火事装束の胸当が取り入れられるようになったのではなかろうか。それは風切りの胸に刺繍されている図柄として中央に大きく付けた家紋がそのまま使用されたり、防火を意味する三つ巴の紋であったり、雨と水とに関係深い龍の図柄によってもうかがわれる。又材質が火事装束に用いられた羅紗地と同じであり、緋の色であったりすることからも推察されるのである

**** たすき

桜色の新モス巾74cm丈2.20cmのものを縦に2つ切りにした大きさを黒の衣裳の上に大きく華やかに結ばれる。色に特別な意味はなく各村において異なる。(図10)

***** 腕 貫

紺又は黒木綿とあさき又はあい色木綿の袷仕立で、腕を包むもので、体の手の腕貫は子供の手袋のように紐をつけて首にかけ、手首はこはぜで、はめはずし出来るようになっている。(図11) この他脚半のように紐でしぼるものなどもあり、おもに仕事に従事する時や剣舞士などが使用した¹¹⁾。

***** 脚 半

黒(紺)木綿と郡青色の木綿の袷仕立で一ヶ所接ぎを入れ、足の形を自然におおうよう工夫されている。上部は一本の紐でしぼり、こはぜで開閉出来るようになったもので、これを江戸脚半¹²⁾といい現代にも用いられている。(図11) この他一枚裁ちの天津脚半^{ははき}と脛巾などがある。昔は礼具(毛すねを人前にさらさぬ為)の一つであり、衣装にはかくことの出来ないものであった。又仕事に従事する時も用いる

結 語

稲武を含む矢作川上流一帯は、近世の社会状況である。部落から都市へ流れる勤労者が、とみに多い。この為、昔は盛大であった村まつりも衰亡の一途をたどり、まつりの名ごりをとどめる程度に維持されている部落もあり、衣裳も取り立てる程のものはない。

まつり以外に娯楽の多くなった現在経費、維持費を多く必要とするまつりが、今後どのように変化するか、その見通しは暗い。その点、足助地方の夜念仏や、笠投の棒の手のように観光事業と結びつきのある祭礼行事は、町政の力をかりて、今後大きく発展すると思われる。先人の残した文化遺産としての郷土芸能の特殊性を保存するために、欠く事の出来ない服装や道具は非常に重要で、古来よりの形態及び材質、色などは、大切に保存されるべきである。しかし、祭礼挙行の当事者及び、郷土芸能研究者もあまり衣裳に関心を示さず、その時代、時代の流行を取り入れて、随時変更し、その記録も残されていない。材質及び特殊な小物など、時代によって再現の困難な物は、いたしかたないとしても、極力その再現に努力し、やむをえない時に

は、記録にとどめるべきであろう。この事は、郷土芸能研究者と祭礼関係者が共に行なわなければ、伝統を尊ぶ祭礼の本質は年と共に失われていくのではないかと憂慮される。したがって当地の祭礼関係者に、伝承上の十分な配慮を切望する。

最後に、本調査に当り、甚大なお協力、ご教示を賜りました当地の教育委員会、保存会並びに神社、仏閣関係の諸氏に深く感謝いたします。

参考文献および引用文献

- 1) 足助役場：文化財指定申請書(1961)
- 2) 門脇禎二：新日本史(1963)
- 3) 香積九世明峰書
(現在平勝寺秘藏)：鳳凰山平勝寺略縁記(1616)
- 4) 鳳凰山平勝寺
職小川泉菴：本寺聖観音菩薩御開扉募縁の趣旨(1959)
- 5) 綾波保存会 夜念仏、綾波踊
- 6) 下中弥三郎：大百科事典(7)(1950)
- 7) 成田鎌箕：重要無形文化財選定「棒の手」(1961)
- 8) 猿投町役場：猿投神社と「棒の手」の由来(1962)
- 9) 森木義彰
日野西資考：風俗事典(1961)
- 10) 下中弥三郎：大百科事典(5)(1950)
- 11) 下中弥三郎：大百科事典(3)(1950)
- 12) 下中弥三郎：大百科事典(6)(1950)

註. 衣裳の色彩名は財団法人日本色彩研究所編「色名帖」による。